

韓国語訳『源氏物語』における 解釈上の諸問題について

——『桐壺』巻（1）——

田 中 幹 子
金 智 慧

はじめに

『源氏物語』は、世界約20カ国以上に翻訳されている。ほとんどの人々は、それぞれの国の翻訳によって『源氏物語』を読む。『源氏物語』を学びに日本にくる留学生は、まず自国の言語に翻訳された『源氏物語』を読んでその世界を知る。あらためてその現実を考える時、日本の研究者は、翻訳の実態について積極的に関心を持つべきではないかと思うようになった。

その端緒として、韓国中央大学校日本語学科の交換留学生である金智慧氏とともに、韓国語訳『源氏物語』の実態について調査・分析に取り組んだ。したがって、本稿は、田中・金の共同研究であり、共同執筆である。

『源氏物語』の韓国語訳の問題点については、2008年に『源氏物語千年記念国際学術大会』で韓国外国語大学校日本語学部教授金鍾徳氏が口頭発表され、^{*1} それをもとに「韓国における『源氏物語』翻訳と研究」を執筆発表されている。^{*2} そこで完訳した訳者の紹介とともに、訳に対する評価もされている。

初めての完訳は、1975年の柳呈訳『源氏物語』上、下（「新装版世界文学全集」四、五巻、乙西文化社1975）であるが、これは与謝野晶子訳をそのまま訳したものとされる。しかし、現在、絶版で手元に入手できない。

*1 伊井春樹監修「源氏物語千年記念 源氏物語国際フォーラム集成」『韓国における『源氏物語』の翻訳と研究』（2009年3月 角川学芸出版）

*2 『韓日軍事文化研究』2009年

続いて1999年に出版されたのが、田溶新訳『源氏物語』1・2・3（ナナム出版）である。田氏は心理学者で、1987年高麗大学校を定年退職したあと、翻訳活動に入った。1989年『日本書記』を完訳している。田訳の『源氏物語』序文には、「柳呈訳の『源氏物語』がもう絶版されており、柳呈訳の『源氏物語』の場合、「底本が明示されていなく、敷衍した点が原本とは相当違って、省略した部分が多かったため、原文と一対一の翻訳には適当でないと思った」と述べ、田訳が韓国初めての完訳だと強調している。田氏は、「日本古典文学全集」の阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注『源氏物語』（小学館・昭和45年）を底本を選び、翻訳の方法として「まず、下段にある現代語訳を翻訳し、註釈の中で必要なものは翻訳書の脚注に入れて、軽いのは本文の中の括弧の中に記し、現代文の中で翻訳しにくい所は原文を探して分かりやすい文章になおした。」と序文で述べている^{*3}。

そして、今もっとも読まれているのが、2007年に出版された金蘭周訳、金裕千監修『源氏物語』（全10巻・図書出版ハンギル社）である。金蘭周氏は日本近代文学を専攻した日本文学専門翻訳家として、著名であり、村上春樹、吉本ばなな、江国香織の本を翻訳して大衆的にもよく知られている。金訳の『源氏物語』は祥明大学の金裕千教授が監修し、ハンギル社で2007年に出版された。この本は瀬戸内寂聴訳の『源氏物語』を底本として翻訳したと述べている。瀬戸内訳本の解説、高木和子の語句解釈も訳している。瀬戸内訳を選んだ理由として「瀬戸内版は日本人達により親近な筆致を駆使することで記録的な販売部数を上げて、日本内での源氏ブームの契機を支度したという評価を受けている。」と監修者の金裕千が述べている。韓国語完訳の決定版と強調している。

金鍾徳氏は、前出の論文で、柳呈訳、田溶新訳、金蘭周訳について、巻名・人物名・地名と儀礼・和歌と草子地の翻訳という四項目を立て、それぞれの訳に対して考察している。各訳への考察を経て、金鍾徳氏は「翻訳を直訳と意訳に分類するが、むしろどれほど原作に忠実な翻訳であるかがより重要な問題だと考えられる。」と述べられている。

本稿では「どれほど原作に忠実な翻訳であるか」を、概論的な観点ではなく

*3 李芝善「韓国語訳『源氏物語』における巻名の訳し方について」（『日本アジア研究』2007年）が、「出版社に問い合わせたところ、「正確には教えられないが、現在まで2万部以上売れている」と述べている。

*4 金鍾徳氏「韓国における『源氏物語』翻訳と研究」（注2参照）

原文の一文比較するという方法で分析したものである。

絶版である柳呈訳は今回入手できなかったため、田溶新訳、金蘭周訳の二訳本の他に、「桐壺」巻について部分的に逐語訳された任チャンシュ訳『源氏物語』（サルリム社）をとりあげた。任チャンシュ氏は、韓国中央大学校日語日文学科教授であり、2008年に『百人一首』を完訳している。任訳本は完訳本ではなく、『源氏物語』を分かりやすいように作者の生涯と作品の主要思想、あらすじ、名文章を抜粋して翻訳した入門書である。円地文子書いた『源氏物語』を中心に、名文章と名場面と知られている部分を抜粋したという。抜粋とはいえ、桐壺巻は充実に訳されていると判断し、日本古典文学を専門としているという理由で田訳、金訳と共に比較することにした。

できうるだけ、細かい観点から、原文がどのような形で翻訳されているかを分析するために、原文をほぼ一行ずつ掲げ、そこに対応する日本古典文学全集の口語訳・それを訳した田訳を軸に、金訳、そのもとになった瀬戸内訳、さらに任訳、参考とした円地訳を並列状にあげ、問題点を評という形で指摘している。^{*5} なお、それぞれ韓訳は、金智慧により日本語訳をつけている。

原文を見分け易くするため、認意でほぼ一文ごとを目安に掲げ、掲げた原文ごとに通し番号を付し枠で囲った。原文に対し膨大な訳文となったため、紙面の都合上、4回に分けて発表していくことを計画している。

—

1. 原文：いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

口語：どの帝の御代であったか、女御や更衣が何人も仕えておられた中に、たいして重々しい家柄ではない方で、目だって帝のご寵愛をこうむっていらっしゃる方があった。^{*6}

田訳：임금 시중을 드는 여러 여어 (女御) 와 강의 (更衣) 들 중에 집안은 미천하나 임금의 사랑을 한 몸에 받는 동호 (桐壺) 라는 여인이 있었

*5 瀬戸内寂聴訳『源氏物語』1 (講談社・2007年)

円地文子訳『源氏物語』1 (新潮文庫・2008年)

*6 日本古典文学全集 阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注『源氏物語 I』(小学館・1970年)の口語訳

다.

王に仕える多数の女御と更衣達のなかで、家柄は微賤だが、王の愛を一身にあつめる桐壺という女人がいた。

評 : 「いづれの御時にか」が訳されていない。また、桐壺更衣の父親は大納言(太政官の次官正し三位相当)であるが、「微賤」という過剰に低い表現をしている。

瀬戸内訳 : いつの御代のことでしたか、女御や更衣が賑々しくお仕えしておりました帝の後宮に、それほど高貴な家柄の御出身ではないのに、帝に誰よりも愛されて、はなばなしく優遇されていらっしゃる更衣がありました。

金訳 : 어느 천황의 치세 적 일이온지요. 여어와 갱의 등 천황의 시중을 드는 수많은 후궁 가운데, 폐하의 사랑을 한 몸에 받아 누구보다 융숭한 대접을 받는 갱의가 있었습니다.

いつの天皇の治世のときでしょうか。女御と更衣など天皇のかしづく数多い後宮のなかで、陛下の愛を一人で受け、誰よりも隆崇な待遇(手厚いもてなし)を受ける更衣がいました。

評 : 家柄について訳されていない。

円地訳 : いつの御代のことであったか、女御更衣たちが数多く御所にあがってられる中に、さして高貴な身分というではなくて、帝の御寵愛を一身に鍾めている人があった。

任訳 : 어느 천왕 때의 일이었던가. 궁중에 뇨고(女御)・고이(更衣) 등의 많은 후궁들이 있는 가운데 명문 출신이 아닌데도 천왕의 총애를 한 몸에 받고 있는 이가 있었다.

いつの天王の時の事だったのか。宮中に女御・更衣などの多い後宮がいるなかで、名門の家柄の出身ではないのに天王の寵愛を一身にあつめている者がいた。

2. 原文 : はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。

口語 : 宮仕えの初めから、我こそはと自負しておられた方々は、このお方を、目に余る者とさげすみもし憎みもなさる。

田訳 : 그녀가 궁중생활을 시작할 때부터 궁내 여러 여인들은 그녀를 눈엣가

시처럼 미워하고 업신여겼다.

彼女が宮中生活を始める時から宮中の多数の女人達は彼女を目の上のこぶのように憎み侮っていた。

評 : 「はじめより我はと思ひあがりたまへる」が省略した上に、「はじめより」の主語を桐壺更衣としている。

瀬戸内訳 : はじめから、自分こそは君寵第一にとうぬぼれておられた女御たちは心外で腹立たしく、この更衣をたいそう軽蔑したり嫉妬したりしています。

金訳 : 애당초 자기야말로 폐하의 사랑을 독차지하고 있는 몸이라 거만을 떨던 여어들은 뜻하지 않은 사태에 부아가 치밀어 이 갱의를 멸시하고 또 질투하였습니다.

そもそも自分こそ陛下の愛を独り占めしている者と驕っていた女御達は思いがけない事態にしゃくにさわって更衣を蔑視して、また嫉妬しました。

評 : 更衣が入内する前に帝の愛を独り占めしていた女御がいたように訳している。

円地訳 : はじめから、われこそはと心驕りしていられる方々からは、身のほど知らぬ女よと爪はじきして妬まれるし、

任訳 : 궁궐에 입궐하는 첫날부터 대단한 자부심을 가지고 있었던 그를 다른 후궁들은 눈엣가시처럼 멸시하거나 미워하였다.

宮中に入内する最初の日からものすごい自負心を持っていた彼女を他の後宮達は目の上のこぶのように蔑視したり憎んだ。

評 : 桐壺更衣が「はじめより我は」が思っていたことになる。

3. 原文: 同じほど、それより下藪の更衣たちは、ましてやすからず。

口語訳 : 同じ身分、あるいはそれより低い地位の更衣たちは、なおさら気持がおさまらない。

田訳 : 그녀와 신분이 비슷하거나 낮은 갱의들이 더욱 심하게 괴롭혔다.
彼女と身分が似ているか、低い更衣達がもっとひどくいじめた。

評 : 「ましてやすからず」を「ひどくいじめた」と原文を越えた訳をしている。

瀬戸内訳 : まして更衣と同じほどの身分か、それより低い地位の更衣たちは、

氣持のおさまりようがありません。

金訳 : 하물며 갱의와 비슷하거나 낮은 신분의 후궁들은 제 마음을 어떻게 가누어야 할지 몰랐습니다.

まして更衣と似ているか低い身分の後宮達は自分の心をどうおさめたらいいか分かりませんでした。

円地訳 : その人と同じくらい、またそれより一段下った身分の更衣たちにすれば、まして氣のもめることひとかたではない。

任訳 : 동등한 지위에 있거나 또는 그보다 신분이 더 낮은 고이들은 하물며 편안한 마음일 리가 없었다.

同等な地位にいたりまたはそれより身分がもっと低い更衣達はまして気楽な心であるはずがなかった。

4. 原文：朝夕の宮仕につけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちになるを、

口語 : 朝夕の宮仕えにつけても、人の氣をもませてばかりいて、恨みを受けることが積もり積もったせいであったろうか、すっかり病弱になってゆき、なんとなく淋しく頼りなげな様子で里下がりが多くなるので、

田訳 : 조석으로 시중을 들다가도 마음을 만 데로 쓸 때가 많고, 주변의 원한을 사는 일이 쌓이고 쌓인 탓인지 동호는 점점 병약해져 갔다. 그녀는 병이 들어 괴로운 모습으로 친정집에 내려가곤 했다.

朝夕で仕えながらも、心をほかのことに使う時が多く、周りの恨みをかう事が積もり積もったせいなのか、桐壺は次第に病弱になって行った。彼女は病氣にかかって苦しい姿で実家に下ったりした。

評 : 「人の心のみ動かす」のは更衣に対しての帝の寵愛だが、更衣が別なことに心を使っていると訳している。また、「もの心細げに」を「病氣にかかって苦しい姿」と精神的な病を、重病にかかったように訳している。

瀬戸内訳 : 更衣は宮仕えの明け暮れにも、そうした妃たちの心を掻き乱し、烈しい嫉妬の恨みを受けることが積もり積もったせいなのか、次第に病がちになり衰弱してゆくばかりで、何とはなく心細そうに、お里に下がって暮す日が多くなってきました。

金訳 : 갱의는 폐하를 모시고 사는 나날 속에서, 그런 후궁들의 마음을

어지럽히고 질투에 사무친 원망을 듣는 일이 쌓이고 쌓인 탓인가 짐차
몸이 쇠하고 병석에 눕는 일이 잦아, 초췌한 모습으로 사가에 나가
지내는 날이 많아졌습니다.

更衣は陛下を仕えて行く日々の中で、そのような後宮達の心を乱して
嫉妬に徹する恨みを聞くことが積もり積もったせいなのか次第に体が
衰えて寝込むことがしきりであって、やつやつしい姿で私家に出て過
す日が多くなりました。

評 : 原文の「うらみ」を嫉妬に徹する恨みと加えている。これは、瀬戸内
訳の「烈しい嫉妬の恨み」の部分まで訳しているからだと思われる。

円地訳 : 朝夕の宮仕えにつけても、始終そういう女人たちの胸をかき乱し、そ
の度に恨みを負うことの積もりつもったためでもあったろうか、だん
だん病いがちになってゆき、何となく心細そうにともすれば実家下り
の度重なるのを、

任訳 : 아침저녁으로 궁중의 일을 하여도 다른 후궁들의 질투와 시기만을
돌을 뿐이고, 그 때마다 서러움과 한이 쌓였다. 그 때문일까? 자주
병이 들고 웬지 모르게 마음도 초조하고 불안해 친정으로 내려가는
일이 잦아지는 것을,

朝夕に宮中の事をやっても他の後宮達の嫉妬と妬みだけを掻き立
てるだけで、そのたびに悲しみと恨みが積もった。そのためなのか?
病気になりがちでなんとなく心も焦り、実家に下っていくことが頻繁
になるのを、

5. 原文：いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚ら
せたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

口語訳 : 帝はいよいよたまらなく不憫な者とおぼしめされて、人の非難に気が
ねなざる余裕さえもなく、きっと世の中の話の種にもなってしまうそ
うなもてなされかたである。

田訳 : 임금은 이런 그녀가 안쓰러워, 다른 사람이 비난하건 말건 세상의 이
야깃거리가 될 만큼 대우를 해주었다.

王はこのような彼女が衰れで、他の人が非難しようがしまいか、世の
中の話の種になるほど待遇してあげた。

評 : 「え憚らせたまはず」を「非難しようがしまいか」と意識している。

瀬戸内訳：帝はそんな更衣をいよいよいじらしく思われ、いとしさは一途につ
のるばかりで、人々のそしりなど、一切お心にもかけられません。
全く世間に困った例として語り伝えられそうな、目を見張るばかりの
お扱いをなさいます。

金訳：천황은 그런 讐의를 더더욱 어여뻐 여기어 사랑은 날로 깊어만 갈 뿐,
주위 사람들의 수군거림 따위에는 전혀 아랑곳하지 않았습니다. 참으
로 천황은 세간에 애깃거리로 회자될 만큼 애뜻하게 讐의를 대하였습니다.

天皇はそのような更衣をもっともっとかわいらしく思い、愛は日々深
まるだけで、周りの人達がひそひそと話すことなんかは全然ものとも
しなかったです。実に、天皇は世間で人口に膾炙するほど哀切に更衣
を対しました。

評：「そしり」を「ひそひそと話す」と意味を変えている。

円地訳：帝はやるせないまでに不憫なものと思召され、いよいよいとしさの増
さる御様子で、人の非難など一切気かけようともなさらない。まっ
たく後の世の語り草にもなりそうな目に立つ御慈しみ方なのであっ
た。

任訳：천왕은 측은하게 생각하여 더욱 더 불쌍히 여기고 주위의 비난 따위는
전혀 신경 쓰지 않았다. 참으로 후세의 이야깃거리가 될 법한 눈에
띄는 자이었다.

天王は哀れと思ってもっと可哀そうに感じて回りの非難などは全然気
にできなかった。まさに後世の話の種になるような目立つ慈愛だった。

6. 原文：上達部上人なども、上あもなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御
おぼえなり。

口語：上達部、殿上人などまでも、どうも困ったなりゆきと思い、目をそむ
けそむけていて、まことに正視にたえないほどのご寵愛ぶりである。

田訳：임금은 그녀의 일이라면 온갖 사소한 것에까지 일일이 마음을 써 가며
눈물겨울 정도로 사랑했다.

王は彼女のことならあらゆる些細なことまで一つ一つ気を使いながら
涙ぐましいほど愛した。

評：「上達部、上人などあもなく目を側めつつ」が抜けている。「いとまば

ゆき人の御おぼえ」という王の寵愛を、王が更衣の些細なことまで気を使っていると訳している。

瀬戸内訳：上達部や殿上人もあまりのことに見かねて目をそむけるという様子で、それはもう目もまばゆいばかりの御鐘愛ぶりなのです。

金訳：그 도가 너무도 지나친지라 보다 못하여 눈길을 돌리는 상달부나 전상인도 있으니, 총애하는 모습이 눈이 부실 정도인 탓입니다.
その度があまにも過ぎたので見切れず目をそむけにする上達部や殿上人もいるに、寵愛のぶりが眩しいほどであるためです。

円地訳：上達部や殿上人なども、次第にこの話になると不服らしく眼をそらすようになってきて、「いや、まったく、眩しいような御寵愛ぶりですな」

任訳：귀족들도 도리에 어긋나는 일이라고 등을 돌릴 만큼 극진한 총애였다.
貴族達も道理に逆らう事だと目をそらすほど劇震な寵愛だった。

評：円地訳の会話文を任訳はとっていない。

7. 原文：唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、

口語訳：唐土でも、こうしたことがもとになって、世の中も乱れ、ひどいことになったのだと、しだいに世間一般でも、おもしろからぬこと、人々のもてあましの種になって、はては、楊貴妃の例までも引合いに出しかねないほどになっていく事態なので、

田訳：중국에서도 이런 일이 화근이 되어 세상이 어지러웠던 일이 있었다.
끝내는 양귀비(楊貴妃)의 예까지 끌어들이지 않으면 안될 지경으로 골치 아픈 상황이 되고 말았다.

中国でもこのような事が禍根になって世の中が乱れたことがあった。遂には楊貴妃の例まで引き入れなきゃいけない頭の痛い状況になってしまった。

評：「あぢきなう人のもてなやみぐさになりて」の部分の訳がない。

瀬戸内訳：「唐土でも、こういう後宮のことから天下が乱れ、禍々しい事件が起こったものだ」などと、しだいに世間でも取り沙汰をはじめ、玄宗皇帝に寵愛されすぎたため、安祿山の大乱を引きおこした唐の楊貴妃

の例なども、引き合いに出すありさまなので、

金訳 : “당나라에서도 이런 후궁 때문에 천하가 혼란에 빠져 상서롭지 못한 사건이 생겼는데.” 이렇게 세간에서도 수군덕수군덕 풍문이 나돌기 시작하고, 당나라 현종의 지나친 총애 때문에 안녹산의 대란을 일으킨 양귀비의 예마저 거론되는지라,
「唐国でもこんな後宮のせいで天下が混乱に陥りめでたくない事件が起きたが。」

このように世間でもこそそ風聞がとりざたされはじめ、唐国の玄宗の度が過ぎる寵愛のせいで安祿山の乱を起こした楊貴妃の例までとりあげられるので、

評 : 瀬戸内訳が安史の変を詳しく記しているので、その影響を受けている。

円地訳 : 「左様、唐土でも、こういう女の間違いから事が起こって、ついには天下の乱れとなるような、よろしからぬことがありました」などと噂し合った。世間でもだんだんこれを困ったことに取り沙汰して、玄宗皇帝が楊貴妃の色香に溺れて、国を傾けた例などまで引かれるようになってくると、

任訳 : 세간에서도 환영할 일이 아니라며 사람들의 걱정거리가 되었다. 결국에는 중국의 현종황제가 양귀비의 용모에 빠져 국가가 기울었다는 전례를 끌어들이게 되는 상황까지 이르러

世間でも歓迎すべきことではないと人達の心配の種になった。結局は玄宗皇帝が楊貴妃の容貌に陥って国家が傾いたという前例を引き入れるようになる状況まで至って

8. 原文：いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて交らひたまふ。

口語 : 更衣はまことにいたたまれない思いのすることが多いけれども、畏れ多い帝のご愛顧のまたとないことにおすがりして宮仕えをしていらっしゃる。

田訳 : 동호는 견디기 어려운 생각이 들 때가 많았지만, 임금의 거룩한 사랑에 감복하면서 궁내에서 시중을 들고 있었다.

桐壺는 耐え難い 思いをする時が多かったが、王の聖なる愛に感服しながら宮中で仕えをしていた。

評 : 帝の愛に感服することは、更衣が帝に頼る気持ちが込められていない。
また、[거룩한 사랑] の [거룩하다] は「聖なる様様、偉大な功績、神々
しい神殿」などの意味で更衣に対する帝の愛の意味と違う。

瀬戸内訳 : 更衣は、居たたまれないほど辛いことが多くなってゆくのでした。
ただ帝のもったいない愛情がこの上もなく深いことをひたすら頼みに
して、宮仕えをつづけています。

金訳 : 艱의는 견딜 수 없을 만큼 괴로운 일이 많아졌습니다. 하나 다만 분에
넘치는 폐하의 깊디깊은 애정에 의지하여 한결같은 마음으로 폐하의
시중을 들었습니다.
更衣は耐え難いぐらい辛いことが多くなりました。ただ、身に余る陛
下の深い深い愛情に頼って、一途なおもいで陛下のそばでかしくま
した。

評 : 「一途なおもいで」が加わっているのは、瀬戸内訳の「ひたすら頼み
にして」の部分を読しているからだと思われる。

円地訳 : 当の更衣の身にすれば聞きづらく、居たたまれない思いのすることば
かりであるが、唯一つ、帝の御愛情の世に類いないまで深く濃やかな
のを頼みの網として、表面はこの上なくみやびやかに見える後宮の女
人たちの間に立ち交じって宮仕えの日々を送っていた。

任訳 : 고이는 어찌하면 좋을지 몰랐지만 더할 나위 없는 천왕의 애정을 의지
삼아 후궁들 사이에 섞여 나날을 보내었다.
更衣はどうすればいいか分からなかったが、申し分のない天王の愛情
を頼りにして後宮達の中で混じって日々を過した。

評 : 円地訳が挿入した「表面はこの上なくみやびやかに見える」は訳さな
かった。

9. 原文 : 父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしある
にて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にも
もいたう劣らず、何ごとの儀式をももてなしたまひけれど、

口語 : 父の大納言は亡くなって、母の、大納言の北の方というのが、昔かた
ぎの、教養の身についた人であって、両親が揃い、現在のところ世間
の信望はなやかなる御方々にも、たいしてひけをとらぬように、どのよ
うな宮中のしきたりをも処置なさったけれども、

田訳 : 그녀의 친정 아버지 대납언(大納言)은 일찍 세상을 떠났다. 어머니인 대납언의 본처는 전통적인 교양이 몸에 밴 여인이었다. 동호는 궁중의 법도에 따라 잘 처신했지만,

彼女の実家の父親の大納言は早く世を去った。母親である大納言の本妻は伝統的な教養が身につけている女人であった。桐壺は宮中の法度に従ってよく振舞っていたが、

評 : 「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず」의訳が丸ごと省略されている。それに、宮中の法度に従ってよく振舞っていたのが桐壺だと書いているが、宮中のしきたりの万端をまかなっているのは母北の方なのだから主語も間違っている。

瀬戸内訳 : 更衣の父の大納言はすでに亡くなっていて、母の北の方は、ふるい由緒ある家柄の生まれの上、教養も具わった人でしただけに、両親も揃い、今、世間の名声もはなばなしいお妃たちに、娘の更衣が何かとひけをとらないようにと気を張り、宮中の儀式の折にも、更衣はもとよりお供の女房たちの衣裳まですべて立派に調べ、その他のこともそつなく処理して、ことのほか気を配っておりました。

金訳 : 갱의의 아버지 대납언은 이미 돌아가셨으나 어머니는 유서 깊은 집안에서 태어난데다 교양도 겸비한 사람인 터라, 자신의 딸 갱의가 양 부모가 다 있고 세간의 명성도 자자한 후궁들에게 무엇 하나라도 뒤지지 않도록 갖은 애를 썼습니다. 궁중에 의식이 있을 때는 갱의는 물론이요 거느리고 있는 궁녀들의 옷까지 호화롭게 지어올리고, 그밖의 일도 정성껏 처리하는 등 각별한 신경을 썼습니다.

更衣の父親である大納言はもう亡くなりましたが、母親は由緒深い家で生まれたくえに教養も兼備した人なので、自分の娘の更衣が両親がいて世間の名声が高い後宮達に何一つ劣らないようにいろいろと努めました。宮中で儀式がある時は更衣は勿論従えている宮女の服まで豪華にして、その外の事も丹念に処理するなど、格別に気を使いました。

評 : 「更衣は勿論従えている宮女の服まで」は瀬戸内訳の影響を受け、挿入している。

円地訳 : 父の大納言はもう亡くなっていたが、母親の北の方は由緒ある家柄の出の折目正しいひとであった。現在、両親揃って、はなやかに世を張っている家から入内された方々にも劣らないように、御所での晴れの

儀式の折にも、更衣御自身はもとより、お供の女房の装束そのほかに
も心を配って、けっこう、万事にそつなく取りまかなくていられるけ
れども、

任訳 : 아버지 다이나곤 [大納言] 은 죽었고 어머니는 예의 바르고 교양
있는 사람이었다. 부모님이 살아계시고 사람들의 두터운 신뢰와
좋은 평판을 얻고 있는 사람들에게도 그다지 뒤질 것 없이 어떤 궁궐
행사도 무난하게 처리해왔지만,

父親の大納言は死に、母親は礼儀正しくて、教養のある人だった。兩
親が生きておられて、人達の厚い信頼と良い評判を受けている人達に
もそれほど劣ることなく、どんな宮中の行事も無難に処理して来たが、

評 : 「世のおぼえはなやかなる御方々」を「厚い信頼と良い評判を受けて
いる人達」とニュアンスをかえて訳しており、これは円地訳とも違う。

10. 原文：取りたててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ抛りど
ころなく心細げなり。

口語 : 格別にしかとした後楯がないのだから、何かあらたまったことのある
ときには、やはり頼るあてもなく、心細げな様子である。

田訳 : 특별한 후원세력이 없고 보니 무슨 새로운 사태라도 생기게 되면 의지
할 곳 없는 것이 항상 불안했다.

特別な後見勢力がなくて、何か新しい事態でも生じたら頼る所がない
ことがいつも不安だった。

評 : 「事ある時」を「何か新しい事態」とややちがう意味で訳している。
「なほ」「げ」が訳されていない。

瀬戸内訳 : とはいっても、これというしっかりした後見人がないため、何か改
まった行事のある時には、やはり頼りないのか、心細そうに見えまし
た。

金訳 : 그렇다고는 하나, 공식적인 행사가 있을 때에는 이렇다 할 뒷배가 없
는 것이 아무래도 아쉬운지 불안하게만 보였습니다.

そうとはいっても、公式的な行事があるときはこういった後ろ身がい
ないのがどうやら残念なのか不安にだけ見えました。

評 : 「公式的な行事」と正しく訳している。だが、「そうとはいっても」の
接続詞を挿入している。これは、瀬戸内訳の「とはいっても」を訳し

ているからであろう。

円地訳：何といってももしっかりした後見人がないので、これぞという時には相談相手もなく心細そうである。

任訳：무엇보다도 믿음직한 후견인이 없고 유사시 의지가 될 만한 사람이 없어 늘 불안한 모습이었다.

何よりも、頼もしい後見がなく有事の際、頼りになるような人がなくていつも不安な姿だった。

評：「事ある時」を「有事の際」と訳しているのは、円地訳の「これぞという時」を訳しているからだと思われる。

11. 原文：前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。

口語：帝とこの更衣とは前世においてもご宿縁が深かったのであろうか、世にまたとなく清らかに美しい玉のような皇子までがお生まれになった。

田訳：동호제와 동호는 전생에 인연이 깊었던지, 세상에 둘도 없이 예쁜 황자가 그들 사이에서 탄생했다.

桐壺帝と桐壺は前世に因縁が深かったのか、世上に二つもない綺麗な皇子が彼らの間から誕生した。

評：「きよらかなる玉」と「さへ」が訳されていない。

瀬戸内訳：それにしても、よほど前世からのおふたりの御縁が深かったのでしょうか、やがて、世にもないほど美しい玉のような男の御子さえお生まれになったのです。

金訳：하나 전생에서도 두 사람의 인연이 어지간히 깊었던 것일까요. 갱의는 마침내 세상에 둘도 없이 아름다운 구슬 같은 남자 아이까지 낳았습니다.

しかし、前世でも二人の因縁が相当深かったためでしょうか。更衣は遂に世上で二つもない美しい玉のような男の子まで産みました。

評：「さへ」を「まで」と訳している。瀬戸内が挿入した「それにしても」を意識しすぎ、「しかし」と訳し、逆説にしている。

円地訳：前世からの宿縁が格別深くあられたものであろう、この世のものとも思われぬほど美しい男御子をこの更衣はお生みになった。

任訳：천왕과 고이는 전생에서도 인연이 깊었는가. 세상에 둘도 없을 정도

로 깨끗하고 구슬처럼 아름다운 태자까지 낳았다.

天王と更衣は前世でも因縁が深かったのか。世の中に二つもないほど清くて玉のように美しい太子まで産んだ。

評 : 円地訳には「さへ」がないのに、任訳には訳していて、この部分は円地訳ではなく、ほかの書を参考にしていることが分かる。

12. 原文：いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちごの御容貌なり。

口語訳：帝は、その若宮をまだかまだかと待ち遠しくお思いになって、急ぎ宮中にお召し寄せになってごらんになると、異常にすぐれたご器量である。

評 : この部分訳されていない。

瀬戸内訳：帝は早くこの若宮にお会いになりたく、待ち切れなくて急いで宮中に呼びよせてご覧になると、それはもう、たぐいまれな美しく可愛らしいお顔の若宮なのでした。

金訳 : 천왕은 어린 황자를 한시라도 빨리 보고 싶은 마음에 미처 기다리지 못하고 서둘러 궁중으로 불러들이니, 황자는 뭐라 형용할 길 없으리만큼 아름답고 귀여운 모습이었습니다.

天皇は幼い皇子を一刻でも早く会いたい気持ちで待ちきれず急いで宮中に呼ぶに、皇子はなんと形容する道がないぐらい美しく可愛い姿でした。

円地訳：帝はどんな様子かと日柄の立つのを待ちかねて、急いで召し寄せてご覧になると、襜褕の間ながら世にも珍しい御器量である。

任訳 : 천왕은 하루라도 빨리 만나고 싶어서 급히 어전에 들게 하여 대면하니 비길 데 없이 멋진 태자의 용모였다.

天王は一日でも早く会いたくて急いで御所に入らせて対面するに比べ物にならない素敵な太子の容貌だった。

13. 原文：一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、

口語 : 第一の皇子は右大臣家出身の女御のお生みになった方で、お世話する人々もしっかりとしており、疑いもない世継ぎの君として世間の人々もたいせつにお仕え申しあげているけれども、

田訳 : 제 1 황자는 우대신 (右大臣) 집 출신의 여어가 낳았기에, 돌보는 사람도 든든했다. 세상 사람들은 그가 황태자가 되리라고 믿고 있었다.

第一皇子は右大臣家の出身の女御が産んだので, 世話をする人も心強かった。世間の人達も彼が皇太子になるはずだと信じていた。

評 : 右大臣家が後見だからしっかりしているということなのだが, 田訳では右大臣家の女御が産んだ結果, 世話をする人も心強かったと取れる。また, 第一皇子が世間から大切にされていたことが書いていない。

瀬戸内訳 :すでにいらっしゃる一の宮は権勢高い右大臣の娘の弘徽殿の女御がお生みになったので, 立派な外戚の後見がしっかりして, 先々まぢがいなく東宮に立たれるお方と, 世間の人々も重く見て大切にお扱いしていました。

金訳 : 그러나 사람들은 권세 높은 우대신의 딸 고키덴 여어의 몸에서 태어난 제 1 황자가 이미 있는지라, 외척의 뒷배가 든든한 첫 황자가 장차 동궁이 될 것이라 믿어 히술히 대하지 않았습니다.

だが, 人達は権勢高い右大臣の娘弘徽殿女御の体で生まれた第一皇子がもういるので外戚の後見が頼もしい第一皇子が将来東宮になると信じて疎かに待遇しませんでした。

評 : 瀬戸内訳の「権勢高い」と挿入した部分までを訳しているが、「疎かに待遇し」なかったのは誰かがはっきりしない。

円地訳 :一の御子は右大臣の女御がお生みになった方で, 外戚の權威が強く, 従って「これこそ間違もなく東宮に立たれる御方」と世間でも重く見て大切にお仕え申しているが、

任訳 : 첫 번째 태자는 우대신 집안의 뇨고 소생으로 든든한 후견인이 있었고 의심할 여지없이 천왕의 뒤를 이를 태자로서 소중히 보살핌을 받고 있었지만

第一皇子は右大臣の家柄の女御の所生で, 頼もしい後見がいて, 疑う余地もなく天王の後を継ぐ太子として大切に面倒をみてもらっていたが、

評 : 円地訳の会話文を説明文にしている。

14. 原文：この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。

口語：この弟宮のお美しさにはとてもお並びになりようもなかったから、帝は、兄宮のほうは一とおりのたいせつなお方とおぼしめされるだけで、この弟宮のほうをば、ご自身の秘蔵子としてご寵愛になることこのうえもない。

田訳：임금은 제 1 황자도 자신의 아들이었으므로, 총애를 하기는 했지만, 형으로서 아우만큼 빼어나지 못했기 때문에 당연히 아우를 훨씬 더 사랑했다.

王は第一皇子も自分の息子だったので、寵愛をすることはしたが、兄として弟ほど優れてないため、当然に弟をはるかに愛した。

評：「にほひには」の訳がされていない。また、第一皇子が自分の子供だからと訳し、第一皇子を公的、若宮を秘蔵子としてするという細かなニュアンスが訳されていない。

瀬戸内訳：けれども、この新しい若宮の、光り輝くばかりのお美しさには比べようありません。

帝は表向き一の宮を一応大切になさるだけで、この若宮のほうを御自分の秘蔵っ子として、限りなくお可愛がりになるのでした。

金訳：하나 이 어린 황자의 눈부신 아름다움에는 비할 바가 못 되었습니다. 천황은 겉으로야 제 1 황자를 소중히 다루었으나, 어린 황자를 내심 자신의 비장의 아이라 여기고 한없는 사랑을 쏟았습니다.

しかし、この幼い皇子の眩しい美しさには比べ物になりませんでした。

天皇は表では第一皇子を大切にしましたが、幼い皇子を内心自分の秘蔵子と想い、限らない愛を注ぎました。

評：「眩しい」は瀬戸内訳の「輝くばかりの」を訳したもの。

円地訳：この新しい御子の輝くばかりのお美しさには較ぶべくもなかったので、帝は一の御子を表向き一通り大切になさるけれども、この若宮は格別御秘蔵になさって、御自身でお世話なさることもひとかたでない。

任訳：이번에 태어난 태자의 아름다움에는 비교가 되지 않았다. 천황은 겉으로는 첫 번째 태자를 귀중히 여기는 것처럼 행동했지만 내심으로는

이번에 태어난 두 번째 태자야말로 가장 소중하게 생각하고 말할 수 없이 귀여워했다.

今回生まれた太子の美しさには比べ物にならなかった。天王は表としては第一皇子を貴重にしているように行動したが、内心では今度生まれた二番目の太子こそ一番大事に想って言いようもなく可愛がった。

評 : 「美しさ」が訳している。前の「輝くばかりの」は訳していない。「秘蔵子」というのは韓国語ではあまり使われていない言葉で「秘蔵」は「秘蔵の武器」と使われることが多くて「内心では今度生まれた二番目の太子こそ一番大事に想って言いようもなく可愛がった。」と書いた。また、円地訳の「御自身でお世話になさることもひとかたではない」を訳さなかった。

任訳の原文の直訳はここで一旦終わっている。以下任訳は、八章まであらずじとなる。

二

ここまでの三者の訳の問題点についてあらためてまとめてみる。

田訳は、訳者自身によれば、「現代語訳を翻訳し、註釈の中で必要なものは翻訳書の脚注に入れて、軽いのは本文の中の括弧の中に記し、現代文の中で翻訳しにくい所は原文を探して分かりやすい文章になおした。」とあったが、金訳、任訳に比べ、訳の杜撰さがあきらかである。

まず、原文に基づいたはずであるのに、冒頭の「いづれの御時にか」(本文通し番号1、以下同様)から「はじめより我はと思ひあがりたまへる」(2)「上達部、上人などもあいなく目を側めつつ」(6)「あぢきなく人のもてなやみぐさになりて」(7)「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず」(9)「いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせてご覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり」(12)などは、まったく訳されていない。この他、細かな箇所だが、文全体に大きな影響を与える副詞や副助詞「なほ」「げ」(10)、「さへ」(11)、また光を形容する重要な「にはひ」(14)も訳されていない。

また、大きな問題として原文と主語が違う例がある。「人の心をのみ動かし」(4)の主語は、「桐壺更衣への帝の寵愛」が主語であり、それが「人の気をも

ませる」のに、田訳では、桐壺更衣が「心をほかのことに使うことが多く」となっている。また、桐壺更衣の母が彼女の世話をしている「何ごとの儀式をももてなしたまひけれど」（9）ののだが、田訳では、桐壺更衣自体がもてなしていることになって意味が異なっている。

さらに、原文の解釈を間違っして訳している場合がいくつもある。「いとやむごとなき際にはあらぬが」（1）は、けっして高くはないが、或程度の身分であるという意味であるのに、「微賤」として桐壺更衣を卑しい身分としている。田訳が、桐壺更衣を実際よりはるかに卑しい身分とするのは、これ以後も続き、桐壺更衣の人物像を考える上で正しい判断ができなくなる重大な誤りである。

また、「上達部、上人などもあいなく目を側めつつ」（6）を訳さなかったかわりに「王は、彼女のことならあらゆる些細なことまで一つ一つ気を使いながら涙ぐましいほど愛した」とまったく原文と別な文章を作っている。

さらに桐壺が帝の愛だけにすがっている「かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて」（8）の部分「帝の愛に感服する」と訳し、まるで神の愛にひれ伏すような表現で訳している。

この他「事ある時は」（10）は、大きな宮中行事の意だが、田訳では新しい事態が起きたときと訳している。また一の皇子が右大臣の娘腹ゆえに、後見がしっかりしているという意の「寄せ重く」（13）が田訳では「世話している人が心強かった」と少しづつニュアンスが変わっている点が多い。

金鍾徳氏が、田訳に対し「完訳」というには大層恥ずかしいほど、物語の主題が理解できなかったり、主語が変わった翻訳もたくさん目立つ。」と概括的に評されているが、具体的に見ていけばいくほど、まったく違う『源氏物語』となっている。

田訳に比べると、金蘭周訳は、原文をほぼ忠実に訳していると言えるが、金氏自身が表明しているように、完全に瀬戸内寂聴訳の重訳である。したがって、瀬戸内氏の『源氏物語』解釈をそのまま受け継ぎ、そのため瀬戸内氏が脚色した部分もそのまま受け継いでいる。

たとえば、「唐土にも、かかる事の起こりこそ」（7）の部分は、瀬戸内訳が安史の変を詳しく盛り込んだので金訳もそれを受けている。同様に「何ごとの儀式をももてなしたまひけれど」（9）を瀬戸内訳が、「更衣は勿論従えている宮女の服まで」と具体化しているのだが、金訳もそのまま受けている。

さらに原文（11）「前の世にも御契りや深かりけん」の前に瀬戸内訳が「そ

れにしても」を加えられているために、金訳は「しかし」と逆説の接続詞で訳し、その結果本来頼りになる後見がない上に玉の皇子まで生まれて他の女御・更衣に怨まれさらに桐壺更衣の立場が悪くなるという原文が、頼りない立場の上に男皇子が生まれ立場が良くなる意となり、原文と逆になってしまう。

また、原文(13)の「右大臣の女御」に瀬戸内訳の「権勢高い」、原文(14)の「にほひには」に対し、瀬戸内訳の「光り輝くばかり」と加えているのをそれぞれ受けている。この書き加えは、文脈として間違っているとはいえないが、原文にはない瀬戸内氏の解釈であり、それを客観視することなしにそのまま訳してしまうことに問題はないとはいえない。金訳の読者は、どこまでが、瀬戸内氏の解釈がはいっているかの見分けはつかない。また、本稿に取り上げた部分では一箇所、瀬戸内訳とも異なる部分がある。それは、原文(5)の「そしり」を金訳が「ひそひそと話す」とした部分であり、これは意識のしすぎであろう。

任訳は、比較して明らかのように、円地訳をそのまま訳しているのではなく、円地訳が脚色して会話文とした原文(6)や原文(8)の「表面はこの上なくみやびやかに見える」などの挿入部分を採用しておらず、批判的に判断されている。しかし、任訳では、原文(2)の「はじめより我はと思ひあがりたまへる」の主語が桐壺更衣ということになり、桐壺更衣の人物像を理解する上で、大きな誤解を招く誤訳がなされている。

以上、具体的に三訳をみていくと、名称や人物呼称、官職、巻名の訳以上にいかに原文の解釈を損なわず、訳すことの困難さをあらためて認識される。今後もこの比較を続けることによって、どのような文脈が訳する時、難しいのか、それはどのような理由なのかについて考察していきたい。

追記—本稿執筆中にへ素演氏によって「源氏物語桐壺巻の韓国語訳の試み」(愛知学院大学大学院文学研究科研究会紀要 2009年3月)が発表されていることを知った。次稿以降その訳についても触れていきたいと思う。